

2020年4月8日～7月5日

宮城県ゆかりの作家作品を収蔵する宮城県美術館は、近年、仙台市出身の日本画家・太田聴雨の作品 18 点の寄贈を受けました。本特集では、日本美術院展出品作《お産》や戦前戦後の作品が加わり一段と充実したコレクションの中から、新収蔵作品 15 点を含む 24 点を展示します。



《お産》
一九三二年 第十九回日本美術院展
新収蔵作品

太田聴雨について

| おいたち～研鑽の時代

太田聴雨（本名栄吉）は1896（明治29）年、仙台市に生まれました。生まれてすぐに母は家を去り、父は鉱山の仕事で各地を転々としたため、祖父の子として育てられ、祖父亡き後は叔父や叔母の元に預けられました。子どもの頃から絵を好み、廊下の隅で読書に耽る内向的な少年だったといえます。1909（明治42）年に上杉山通小学校を卒業、翌年14歳の時に、父に引き取られて上京しました。

上京間もなく、日本画家内藤晴州^{ないとうせいしゅう}の住み込みの弟子となります。経済的な事情から晴州の家は2年で出ましたが、その後も生計仕事の合間を縫って、仲間とチェチェック会や青樹社を結成し、絵の研鑽に励みました。

読書好きだった聴雨は画業の初期から文学的な心情を表現したいという思いを制作の動機とし、晴州が得意としなかった人物画も独習しました。《日高川》は、裏切った恋しい人を執念で追い、やがて蛇身となってしまう清姫の悲恋物語を描いています。前傾で川に駆け入る清姫の姿を、やや重たい色づかいで描き、その激しい感情が伝わってきます。左手に川が流れる墨彩の模糊とした舞台に清姫を配する構図は、村上華岳の《日高河清姫図》と共通しています。聴雨は1919（大正8）年、国画創作協会展で華岳のこの作品を実見し、編集に携わっていた雑誌『たつみ』に感想を寄せました。同時代の気鋭の画家からも刺激を受け、精力的に画制作に取り組んでいたようです。



《日高川》1919年頃

前田青邨に師事

思うように制作時間の取れない生活に焦りを募らせながらも、聴雨は精進と努力を心がけた力作を青樹社展に並べ、展覧会は徐々に評判を得ていきました。しかし不況に関東大震災が重なり、資金に窮した青樹社は、1924（大正 13）年の第 6 回展を最後に四散。聴雨は失意のまま、数年を過ごすこととなりました。

転機は 1927（昭和 2）年、友人小林三季から日本美術院の画家前田青邨を紹介されたことでした。青邨は、渡欧の経験と東洋古画や仏画の研究を通して線描表現を近代の日本画に再生し、小林古径、安田靉彦と並び、再興後の日本美術院で注目されていた一人です。聴雨は青邨への師事を機に、日本美術院展覧会（院展）にも出品し始めました。

図書館で流行のインド趣味を調べるなど、晴州の家にはいた頃から、聴雨は新しい絵画の考案にも熱心でした。《キリスト》は院展入選を逃しましたが、聴雨の幅広い興味と勤勉を伝える一作でしょう。人物の配し方、面貌、色づかいなどに、初期ルネサンスのフレスコ壁画を研究した成果を見ることができます。

院展初入選は 1930（昭和 5）年、当麻寺の伝説に基づいた《浄土変》で、さらに日本美術院賞も受賞して聴雨は一躍脚光を浴びました。三女が誕生した 1932 年の第 19 回院展出品作《お産》は、前年の東北美術展出品作《夏趣》に続き、女性の生活の中の私的な一場面を描いています。《お産（下図）》には布団の大きさや道具の配置を修正し、画面構成を試行錯誤した跡が残っています。また、母親と嬰兒の面貌は、上から紙を貼り、何度か描き直されています。制作の基調に母性への思慕があったという聴雨は、とりわけ母親の微細な感情の動きを写すことに苦心したようです。

その後も、予防接種を受ける様子を描いた《種痘》（第 21 回院展）が好評を得、天体望遠鏡をのぞく女性たちに「悠久なるもの」を託した《星をみる女性》は第 1 回改組帝展で文部省買い上げとなるなど、女性と現代を象徴する事物を取り合わせた作品で、聴雨は評価を得ていきました。

一方で《鉢の木》や《陶工》は、興行師の叔父の家に育ち、幅広く文学を読み込んだ聴雨らしく、古典芸能や文学への造詣の深さを示す作品です。《鉢の木》の画中には見えるのは、能楽「鉢木」で旅の僧侶に宿を供した貧しい武士です。雪を被った笠が、ここに僧侶もいることを暗示しています。縁には、やがて僧侶をもてなすために火にくべられる松と梅の鉢が置かれています。

《陶工》は、柿の実の赤色に見とれる初代酒井田柿右衛門を描いています。補色を活かした色づかいや屈曲する柿の枝ぶりに絵画的な造形の面白さもある作品です。赤絵の磁器の焼成を成し遂げた柿右衛門の物語は、大正時代に創作され、歌舞伎や学校教科書で親しまれていました。

聴雨は青邨に師事することを決めたとき、土台からやり直す覚悟をし、古径、靉彦にも私淑して、線を主体とした描法を自家薬籠中のものとししました。また、文学的な心境を表すにも感情に流されてはならず、絵に整える冷静さも必要であると気付いたと言います。「有情の画因」を表そうとする聴雨にとって、端正な一本の線にまで要素を究める「非情な技法」は、情念と画制作の均衡を保つために有用でした*1。こうして聴雨の絵画は、日本画の伝統に裏付けられた画品の内に、精神性を湛えた格調高いものとなっていきました。

《熊野》に描かれるのは、母の病気の報に心ざわつかせる熊野が、花見の宴席でその心情を詠歌する能楽の一場面です。春らしい衣裳は、隈で陰影と輪郭を示しながら丁寧な彩色が施され、日本画の絵具の清澄な美しさを見せることに心が配られています。一方、能面と手先には鉄線のような緊張感ある線が用いられています。感情を抑えた表現が、却って宴席の華やぎとは対照的な熊野の心の内をうつし出しています。



《キリスト》1929 年



《夏趣》1931 年



《鉢の木》1932 年頃 新収蔵作品



《陶工》
1931 年頃
新収蔵作品



《熊野》1940 年頃

日本美術院同人～京都

1936（昭和 11）年、聴雨は日本美術院同人に推挙されました。時世粧を写した女性像で評価を得た聴雨ですが、その評価に安住することなく、院展では、^{フィギュアヘッド}船首像に焦点を当てた《船路》（第 21 回）、古典を範にしたような《瀧桜》（第 22 回）、^{やまとたけるのみこと}日本武尊を題材にした《一つ松》（第 23 回）、孤児院の取材に基づいた《悲田院》（第 24 回）と、新しい画境を探っていました。院展出品以降、^{ほうこ}《這子》を出品した蒼穹会展、^{おもて}《面》を出品した橙黄会展など、奥村土牛や酒井三良ら画家たちに交じっての市井展の活動も盛んになりました。

1938 年、美術院の仲間と旅行した足で京都へ向かい、そのまま一年以上をそこで過ごしました。京都滞在中は、それまで関心を向けてきた文学や人間の感情だけでなく、大原女や舞妓を熱心にスケッチして回り、現実の対象に目を向けています。この間大阪で初の個展も開催、良寛や一茶など歴史や文学に因んだ人物像のほか、《祇園久菊》のようなモデルを明らかにした作品も発表しました。《初夏》も、屋外スケッチの経験から試みられた作品でしょう。着衣に外光の描写を意識した彩色が施されています。

戦中～戦後

そんな中、日本は開戦。戦中の聴雨は、美術院その他の制作依頼に古典物語や勤王志士などの絵を描いて応えつつ、博物館に通い、時には借金してまで古画を入手し、模写に打ち込んで過ごしました。病のため静岡で療養を繰り返し、1944（昭和 19）年に家族で伊豆下田へ疎開、1951 年までこの地に留まりました。

敗戦後の画壇では、日本画滅亡論が語られるほどに、日本画の伝統を否定する風潮が強勢となりました。その矢面に立つ一人であった聴雨は 1948 年、仏画を描く自画像《二河白道を描く》を発表して、長い伝統によって完成された日本画への愛着と、その継承者という立ち位置を改めて表明します。一方、翌年は絵具の厚塗りも取り入れながらシベリア捕虜兵の家族を描いた《家郷》（第 35 回院展）や《不二》（第 5 回日展）を発表。伝統を否定するかに見える中に却って新しい美が発見されるのではないかと^{*2}との考えも述べ、伝統的日本画の継承者としての周囲からの期待や使命感、また現状に留まり得ない画家としての向上心の間で、自らの進路に苦悩する様子を見えています。また制作に向かう心境も変化し、人物画への執着心が^{ほく}解れていきました。

法隆寺金堂壁画の模写現場を訪れた経験を下敷きにしたであろう 1941 年の院展出品作《壁画》は、構想を練るうちに人物や道具が省かれ、部屋角と壁面の菩薩像だけが描かれました。1948 年頃からは「非情なもの美」に惹かれて赤絵や染付の器を並べた静物画を描き始め^{*3}、1950 年の院展出品作《苔寺須弥山石》は、庭石を描きながら、石を組んだ人々へ^ほ馳せた想いがその背景に込められています。《牡丹芳》も庭の一隅を^{もつ}没骨濃彩で描いています。《日高川》などに早くから優れた色づかいを見せていた聴雨ですが、後年、濃彩画を試みる中に、改めて持ち前の色彩感覚が発揮されていきました。

戦後の聴雨の制作には、仏画やそれを思わせる絵が多く見られます。《羽衣》もその一点で、土色を刷いた紙本に線描の飛天像は、壁面に描かれる白描の仏画を想起させます。また身体や^{ひるがえ}翻る衣がなす曲線に、線描の美しさだけでなく、造形性への一層の志向も見取れます。《婦女思惟》は、聴雨が描いてきた女性像に悟りを求める菩薩の^{しゆい}思惟の印相を結ばせています。「長い生命に繋がるような女性」や「何とも高いもの」^{*4}を求めて描いていた聴雨の、積年の祈りが映じられているかのようです。

1951（昭和 26）年、聴雨は前田青邨の^{すいばん}推挽により東京藝術大学の助教授となり、助手の平山郁夫はじめ後進の指導に当たりました。1957 年には銀座松坂屋で過去から近作までを陳列した個展を開催。今後も旺盛な活動を期待された矢先、大学で不調を訴え入院、1958 年 3 月 2 日、脳溢血のため逝去しました。



《這子》1940 年
新収蔵作品



《初夏》1939 年頃
新収蔵作品



《羽衣》1955 年



《婦女思惟》1950 年頃
新収蔵作品



《飛鳥観音》
1957 年



《牡丹芳》1956 年

今回の収集によって、聴雨の様々な制作の中でも特に、聴雨が希求した文学的な世界と女性像を表現した作品が充実することとなりました。本特集が宮城県ゆかりの画家太田聴雨を知る機会となれば幸いです。

*1 太田聴雨「画境私語」『塔影』第11巻第12号1935年12月、太田聴雨「私の抱負を語る」『三彩』37号1950年7月 *2「現代日本画の方向」『三彩』57号1952年5月 *3*4 太田聴雨「私の抱負を語る」『三彩』37号1950年7月

(担当 菅野仁美)

太田聴雨 略年譜

| 西暦 | 和暦 | 年齢 | |
|------|------|----|---|
| 1896 | 明治29 | 0 | 1月18日、宮城県仙台市に生まれる。本名栄吉。祖父の子として育てられる。 |
| 1907 | 明治40 | 11 | 祖父が没。叔父、叔母に預けられる。ひとり絵筆をとって遊び、読書を好む、内向的な子どもであった。 |
| 1909 | 明治42 | 13 | 3月、仙台市立上杉山通小学校を卒業。 |
| 1910 | 明治43 | 14 | 東京で働く父に引き取られる。円山派の内藤晴州の弟子となり、2年間住み込みで日本画を学ぶ。 |
| 1913 | 大正2 | 17 | 仕事仲間とチェチェック会を結成。「翠岳」名で巽画会絵画研究例会に《炭焚小屋》を出品、一等賞。 |
| 1915 | 大正4 | 19 | 人形の絵付けや図案制作の仕事で生計を立てながら、小林三季らと青樹社を結成。この頃、画名を中国の故事「人間万事塞翁が馬、枕を推して軒中雨を聴いて眠る」から採って「聴雨」とする。 |
| 1918 | 大正7 | 22 | 小林三季と共に雑誌『たつみ』の編集に携わる。 |
| 1922 | 大正11 | 26 | 6月、日本画の小団体が集まり、反帝展、反院展を旗印に結成した第一作家同盟に青樹社も参加。その後、政治色の強い他の団体と方向性の違いが浮き彫りとなり、離脱。 |
| 1924 | 大正13 | 28 | 5月、青樹社第6回展開催。9月、関東大震災後に青樹社野外展を開催、その後資金調達が上手く行かず青樹社は解散状態になる。生活のため、内職の日々を送る。 |
| 1927 | 昭和2 | 31 | 11月、小林三季の紹介で前田青邨に師事。 |
| 1928 | 昭和3 | 32 | 第15回日本美術院展(院展)に聖書に取材した作品を出品、落選。 |
| 1929 | 昭和4 | 33 | 第16回院展に《キリスト》を出品、落選。 |
| 1930 | 昭和5 | 34 | 第17回院展に《浄土変》を出品、初入選。さらに日本美術院賞の最初の受賞者となる。 |
| 1932 | 昭和7 | 36 | 3月、三女が生まれる。9月、第19回院展に《お産》を出品。 |
| 1934 | 昭和9 | 38 | 2月、小林三季、福田豊四郎、吉岡憲二らと美術人社を結成。5月、東北美術展で《良寛さまと貞心尼》が河北賞。9月、第21回院展に《種痘》を出品、京都市買い上げとなる。 |
| 1935 | 昭和10 | 39 | 第3回東北美術展(河北新報社主催)に《奥野細道》を出品。無鑑査に推される。 |
| 1936 | 昭和11 | 40 | 第1回改組帝展に《星を見る女性》を出品。文部省買い上げとなる。日本美術院同人となる。 |
| 1938 | 昭和13 | 42 | 10月、大智勝観、奥村土牛、酒井三良らと奥美濃、飛騨白川村を探勝後、一人京都へ赴く。 |
| 1939 | 昭和14 | 43 | 京都滞在中に大原方面を写生。春から夏にかけて舞妓を写生し、9月に帰京。 5月、初の個展「太田聴雨作品鑑賞会」を開催(大阪・松坂屋)。 |
| 1940 | 昭和15 | 44 | 3月～10月、京都に滞在。 |
| 1941 | 昭和16 | 45 | 11月、奥村土牛、酒井三良ら5人で第1回橙黄会展を開催、《面》などを出品。 |
| 1942 | 昭和17 | 46 | 日本画家報国会に参加。10月、静岡県伊豆網代で療養する。以後、静かなこの地を訪れるようになる。 |
| 1943 | 昭和18 | 47 | 10月、新設された仏教美術協会の顧問を依頼される。 |
| 1944 | 昭和19 | 48 | 3月、伊豆下田に疎開。聴力が低下し、人との交渉が少ないことに安らぎを感じる。 10月、文部省戦時特別展に《弟橘姫》を出品。 |
| 1948 | 昭和23 | 52 | 第33回院展に《二河白道を描く》を出品。陶器などの静物画を試作し始める。 |
| 1949 | 昭和24 | 53 | 5月、小倉遊亀、勝田哲らと奈良、飛鳥方面に旅行。 第34回院展に《家郷》、第5回日展に《不二》、静岡県美展に《静物》を出品。 7月、奥村土牛、郷倉千靱と共に日展審査員に推される。 |
| 1950 | 昭和25 | 54 | 5月、京都に滞在。第35回院展に《苔寺須弥山石》を出品。 |
| 1951 | 昭和26 | 55 | 12月、前田青邨の推挽によって東京藝術大学日本画科助教授に就任。鎌倉市山之内に転居する。 |
| 1953 | 昭和28 | 57 | 5月、第17回河北美術展の審査員として来仙。母校上杉山通小学校で講演を行う。以後、同第18回、第21回展の審査員も務める。 |
| 1956 | 昭和31 | 60 | 9月、第41回院展に《牡丹芳》を出品。これが最後の院展出品作となる。 |
| 1957 | 昭和32 | 61 | 11月、東京で個展を開催する(銀座松坂屋)。 |
| 1958 | 昭和33 | 62 | 3月2日、脳溢血のため死去。一日付を以て東京藝術大学美術学部教授に昇任。二日付で勲五等瑞宝章が授与される。 |